

可能なものを名付けること、不可能なものに応えること

一九五八年から一九六八年にかけてのブランシヨの共同体の問い

上 田 和 彦

I バタイユへの手紙

一九六二年一月二六日、ブランシヨはバタイユへ一通の手紙を書いている。一九六二年一月といえばバタイユが亡くなる半年ほど前のことで、バタイユはちょうどこの頃『詩への憎悪』を『不可能なもの』と改題して再刊しようとしており、結局は諦めることになる長い序文を書いているところだ¹⁾。ブランシヨのほうはどうかというと、後に『終わりなき対話』や『友愛』に収められることになる論考を書きながらも、一九五八年、ド・ゴールの政権奪取に抗する雑誌『七月十四日』に積極的にかかわることで時局に応じた発言を開始し、一九六〇年の『アルジェリア戦争における不服従の権利宣言』の起草に参加した後、今度は国際的な雑誌刊行を計画しており、マスコロ、アンテルム、デ・フォレ等とともに、集団によるエクリチュールの政治的可能性を模索していた頃だ²⁾。この手紙が、一九五八年から一九六八年五月までのほぼ十年間に亘る

1) Georges Bataille, *Choix de lettres 1917-1962*, Gallimard, 1997, p. 580-582. 序文の草稿は、全集第三巻の註で参照することができる。Georges Bataille, *Œuvres complètes III*, Gallimard, 1971, p. 509-522.

2) 『七月十四日』誌はディオニス・マスコロ、ジャン・シュステールによって一九五八年に創刊され、翌年とあわせて三号刊行される。ブランシヨは二号に「拒否」、三号に「本質的腐敗」と題された論考を寄せている。Le 14 juillet, *Lignes hors-série*, Séguier, 1990; Maurice Blanchot, *Écrits politiques*, Léo Scheer, 2003, p. 9-25; Christophe Bident, *Maurice Blanchot, partenaire invisible*, Champ

ブランショの積極的な政治的活動の期間に書かれていることは、友の死が間近に迫っていることがおそらく分かっていた頃にそれが書かれたことと同様に重視すべきだろう。

まず注目したいのは、そのような時にブランショがバタイユに宛てて、バタイユの語彙（「不可能なもの」）を使って自らの探求について説明しようとしていることだ。

私としましては、いかなる二重の運動に、二つとも必要ではあるが両立させることのできない運動に私は応えなければならないかということが、私にはよく、しばらく前からはずっとよく分かっております。ひとつは（ごくおおざっぱに単純化して申し上げるなら）、弁証法的な完成に向かう全体への情熱、全体の実現化、全体を語る言葉のことです。もうひとつは本

Vallon, 1998, p. 376-387.

「アルジェリア戦争における不服従の権利宣言」は、『七月十四日』誌の中心メンバーであったマスコロとシュステールによって計画された。宣言起草の過程で第九稿からブランショは参加し、形式面でも内容面でも重大な変更をもたらしたとされている（Bident, *Maurice Blanchot, partenaire invisible, op. cit.*, p. 391-402）。厳密な意味での宣言の部分は以下。「——アルジェリア人民に対して武器をとることの拒否を我々は尊重し、正当化されたものと判断する。——フランス人民の名の下に虐げられているアルジェリア人にたいして、援助と保護をもたらすことを自分たちの義務と考えるフランス人の行動を我々は尊重し、正当化されたものと判断する。——アルジェリア人民の大義は、植民地体制を崩壊させるのに決定的に貢献するものであるが、それはすべての自由な人間の大義である。」（Blanchot, *Ecrits politiques, op. cit.*, p. 31.）この宣言は百二十一人の署名を集め、諸官庁や大手報道機関に送付されるが、『ル・モンド』紙が宣言的な部分のみを掲載しただけで、全文を載せたのは少数の定期刊行物だけである（その幾つかは出版を差し止められる）。この宣言は大騒動を引き起こし、ブランショを含めた署名者の多くが告訴される。

『国際評論』は「不服従の権利宣言」の集団的エクリチュールを続行させる目的のもとに計画された。この雑誌は、仏、独、伊の作家たちの間で何度も会合がもたれ、多大な労力が注がれたにもかかわらず、創刊準備号だけしか日の目をみなかった。Cf. *Lignes*, No. 11, Séguier, 1990, p. 159-301; Blanchot, *Ecrits politiques, op. cit.*, p. 44-74; Bident, *Maurice Blanchot, partenaire invisible, op. cit.*, p. 403-417.

質的に非弁証法的なもので、統一性をまったく気にかけず、能力（可能なもの）を目的としません。この二つの運動に、二つの言語活動が応え、あらゆる言語活動にかんして言えば、二つの重大な特徴があります。対立するものは何であれ征服し、最後には真理が全体的に沈黙した同等性として肯定されるようになるために、対峙、対立、否定の言葉となる特徴（思考の要請はそこを通過します）。しかしもうひとつは、何よりも前に「全体よりも前に」、そして全体の埒外で語る言葉、一致も対立もなく、見知らぬもの、異邦のものを迎えようとする常に最初にある言葉です（詩的な要請はそこを通過します）。一方は可能なものを名付け、可能なものを欲します。もう一方は不可能なものに「応え」ます。これら二つの欠かすことはできないが両立させることができない運動の間には、絶え間のない緊張が、支えることがしばしば非常に難しく、実を言えば支えることができない緊張があります。しかしながら、一方か他方を先入観によって放棄することも、それら二つの運動の必要性と、両立させることができないものを統一する必要性とによって人々が要請される度はずれな探求を放棄することも人はできないのです。

この当を得ぬ考察をお許し下さい。しかし、あなたの友愛にたいしてこのように説明しようと努力しなければならないのだと（たとえそれが不器用であっても）、私には思えました。おそらくあなたがパリに戻って来られ、お会いできる可能性がこうして準備されれば、この友愛の要請に抽象的な物言いと別のかたちでお応えできることでしょう³⁾。

要点を確認しておこう。

一) ブランショは二つの運動（二重の運動）に応じなければならぬと述べている。そのひとつは、思考の要請に則した、可能なものを名付ける弁証法的な運動であり、もうひとつは、詩的な要請に則した「不可能なものに「応える」

3) Lettre de Maurice Blanchot à Georges Bataille, 24 janvier [1962] in Georges Bataille, *Choix de lettres 1917-1962*, op. cit., p. 595-596.

運動と言われている。

二) 二つの運動のあいだの関係にかんして、二つの運動は二つとも「欠かすことのできない」、あるいは、「一方か他方を先入観によって放棄することはできない」と言われており、そしてそれらは「両立させることのできない」ものではあるが、「両立させることができないものを統一する必要性」によって要請される「度はずれな探求」を放棄することもできないと言われている。

三) そして最後にブランショは、「あなたの友愛にたいしてこのように説明しようとな努力しなければならない」と思えたと言っている。また、「この友愛の要請に抽象的な物言いとは別のかたちで」応えるつもりがあると言っている。すなわち、友愛に応えるかたちで、両立させることができない二つの運動を統一する必要性についてブランショは説明しようとしている。ここでは、たしかにまず第一にバタイユとブランショの間の特別な「友愛」が念頭におかれていることだろう。しかしながら、ここで「友愛の要請」と呼ばれているものが、単にブランショとバタイユの関係だけにかかわるものかと問う必要がある。つまり、ブランショが「友愛」の名の下に今後一般的に思考していこうとする人と人との間のありうべき関係を考えるうえで、何らかの手がかりがこの書簡で述べられているのではないかと問うてみる必要がある⁴⁾。

これら三つの点を確認したうえで、さらに問題点を絞り込むことにしよう。

4) 「友愛」の名の下に思考される人と人との間のありうべき関係については、例えば次のくだりが参考になる。「私たちは、何かしら本質的なものによって私たちが結びつけられる人々のことを知るのを諦めなければならない。つまり、私たちは見知らぬものとの関係において彼らを迎えなければならない。そうした関係において、彼らのほうも、遠ざかる私たちを迎えるのだから。友愛——従属関係がなく、逸話的な出来事もない関係、とはいうものの、生のあらゆる素朴さが混じり込むこの関係——、それは、共通の異邦性を認めることを経験する。共通の異邦性を認めるゆえに、私たちは私たちの友人について話すことが許されず、彼らに向けて話すことだけが許される。彼らを会話の（あるいは、論考の）主題にすることではなく、合意の動きが許される。そうした動きのなかで、友人たちは、私たちに話しかけながら、このうえなく親密であってさえも、限りない距離、隔てるものが関係と化すための起点となる、あの根源的な隔たりを残しておくのだ。」(Blanchot, «L'Amitié» in *L'Amitié*, Gallimard, 1971, p. 328.)

もう一度先程確認した第一番目の点に戻る。この書簡で二つの運動と呼ばれているもの、すなわち「弁証法的な運動」とその運動とは相容れない運動にかんして、ブランショが「文学と死の権利」以来、『文学空間』、『来るべき書物』、『終わりなき対話』において再三立ち戻り、『災厄のエクリチュール』においても、これら二つの運動を探求の主題のひとつとして考察し続けていることはたやすく見て取れる⁵⁾。また、この二つの運動を扱った論述においては、弁証法的な運動によっては捉えることができないもの、弁証法的な言語活動によってまさに失われるものへと読者の注意を喚起し、それといかにかかわるかを、詩、文学、芸術の問題として提示し、この問題によってどのように近代的な主体の概念が問い直されるかを示す方向に論述が進められていることもたやすく見て取れる。つまり、弁証法的な要請にもはや応えられなくなるまでに主体を問い直す、文学、芸術の要請にいかに応えるかという問いに、ブランショの多くの論述は向かっているように見える。さらに言えば、弁証法的な要請に対抗して、弁証法的な運動を逃れて詩的な要請に応えること（逃れてと言ったのは、弁証法的な運動と詩的な運動は「両立させることができない」と見なされているからだ）の意義が強調されている論考が多いことは否めない。

はじめに引用したバタイユへの書簡が注目に値するのは、そこにおいて、両立させることができないとされている二つの運動を、まさに統一する必要性が語られているからだ。ブランショはこの書簡において、弁証法的な運動をいかに逃れるか、詩的な要請にいかに応えるかではなく、弁証法的な要請と詩的な

5) 参照すべき箇所は数多くあるが、『来るべき書物』以前は特に次の論考を参照されたい。「La littérature et le droit à la mort」 in *La Part du feu*, Gallimard, 1949 ; 「La littérature et l'expérience originelle」 in *L'Espace littéraire*, Gallimard, 1955 ; 「La disparition de la littérature」 in *Le Livre à venir*, Gallimard, 1959. 『終わりなき対話』では、特に第一部「複数的な言葉」を参照されたい。「I. La parole plurielle」 in *L'Entretien infini*, Gallimard, 1969. 『災厄のエクリチュール』でとくに本論考とかかわるのは、「Dans le rapport de moi à Autrui...」で始まる断章と「La passivité est une tâche...」で始まる断章である (*L'Écriture du désastre*, Gallimard, 1980, p. 36-38, p. 48)。この二つの断章においては、まさに「弁証法的な要請」と「不可能なものに応える要請」とに同時に応える必要性が述べられている。

要請にいかにして同時に応えるかという問題を、自らの探求としてだけでなく、「人が放棄することができない探求として」、すなわち普遍的な意義を有する探求として、バタイユに説明しようとしている。

バタイユは『詩への憎悪』を『不可能なもの』と改題する際、「不可能なもの」の名の下に、性愛と、とりわけ死を問題にしようとしていたことが残された草稿から窺われる⁶⁾。たしかにブランショもまた、死を比類なき可能性と見なすヘーゲルやハイデガーを批判し、逆に死を「不可能なもの」として思考していた。しかしながらバタイユへの書簡を書いた頃のブランショは、「不可能なもの」として専ら死だけを問題としていたわけではない。その頃ブランショは、エマニュエル・レヴィナスが提起した問題においても「不可能なもの」を検討していた。そしてその問題設定においてこそ、弁証法的な要請と、不可能なものに応える要請を両立させる必要性が考察されるのである。

Ⅱ 他者への応答の責任

一九六一年から一九六二年にかけて、ブランショはレヴィナスの『全体性と無限』（一九六一年）を契機として、立て続けに三つのテクストを発表している⁷⁾。注目すべきは、これまで主に作家、詩人の書く行為のなかに探求されていた、弁証法の運動に回収されない言語活動と存在の側面が、レヴィナスの思考に共鳴するかたちで、私と他者の間で繰り広げられる言語活動のうちに考察

6) Bataille, *Œuvres complètes III*, *op. cit.*, p. 509-522.

7) これらは、『終わりなき対話』に収められている（三番目のものが特に大幅な変更を加えられている）。«Connaissance de l'inconnu» in *La Nouvelle Revue Française*, No. 108, 1961, p. 1081-1095, repris en forme modifiée dans *L'Entretien infini*, Gallimard, 1969, p. 70-83; «Tenir parole» in *La Nouvelle Revue Française*, No. 110, p. 290-298, 1962, repris en forme modifiée dans *L'Entretien infini*, p. 84-93; «L'indestructible» in *La Nouvelle Revue Française*, No. 112, p. 671-680, 1962, repris en forme modifiée dans *L'Entretien infini*, p. 99-100, p. 102-103 («Le rapport du troisième genre (homme sans horizon)»), p. 191-200 («L'indestructible. 2. L'espèce humaine.»).

され始めることだ。マラルメやリルケやヘルダーリンといった一部の詩人、カフカ等の一部の作家の「書く行為」に特権的に認められていた「非人称的」な言語活動の経験、「中性的」な存在の接近が、他人との言語活動というより一般的な領域において探求され始める。狭い意味での「文学」における言語活動の問題、すなわち文学作品を書く、あるいは読むことのうちに認められていた問題が、他者との言語活動の問題として一般化されるのだ。そして、この言語活動の問題の一般化とともに、それまで明示的には問われていなかった問い、誰と言語活動をするのかという問いが全面に出てくる。文学作品を書く者はいかなる者に変容するかという問いにおいては、主に、言語活動を行う主体とは誰かが問われていたわけだが、言語活動の問題の一般化とともに、誰が誰と言語活動をするのか明示的に探求されるようになる。そしてそれとともに、人間の共同体の問いがはっきりと射程に入れられることになる⁸⁾。

ここでもう一度バタイユ宛ての書簡で用いられていた表現を思い出しておこう。「可能なものを名付ける」弁証法的な運動に対して、非弁証法的な運動は、「不可能なものに答える」と言われていた。詩人や作家の経験、狭義の「文学的」経験を論じていた頃のブランショは、「不可能なもの」あるいは「不可能性」といった言葉によって、詩人や作家が書く行為において蒙る経験、「私」として何かを経験することがもはやできなくなる「経験」——そんな「経験」に「非人称的」や「中性的」といった用語が当てられていた——を明るみに出そうとしていた。死を比類なき可能性として捉え、可能性としての死にかかわることによって主体の能力を基礎づけようとする企てが、不可能性としての死を蒙ることへ逆転し、もはや「私」ではない「彼」の存在様態が接近してくるといった論。そうした論が特に『文学空間』に収められている諸論考で繰り返し見受けられるが、そうした論を展開することで、ブランショは可能性や能力といった考え方では説明がつかない存在の次元、すなわち「不可能性」の次元に

8) 『『誰が他者なのか』という問いが直接的な意味をもたないのは、それが、『人間の「共同体」はいったいどのようになっているのか』というもうひとつの問いに取って代われねばならないからだ [……]。』 *L'Entretien infini*, p. 101.

いかに応えて作品を書くかを問題としていたと言えるだろう。

この問題、すなわち、私が可能性や能力の主体となるためには否定しなければならず、主体としての私には既に常に隠蔽されている存在の次元にいかに応えて言語活動をするかという問題が、レヴィナスの他者論に出会うことによって捉え直される。レヴィナスがまず第一に主張するのは、知ろうと欲する私にとって、他者は絶対的に他なるものに留まり、私は他者を決して理解すること (*comprendre*) ができないということ、そして、他者はそのように、知の対象とは別様に私にかかわることによって、私の知の意志、ひいては私の存在することそのものを問い直すということだ。ブランショは、レヴィナスが「知ること」あるいは「存在すること」と呼ぶものに弁証法的な運動を重ね、そして「不可能性」の次元を私と他者との関係に重ねて考えようとする。

[レヴィナスがいう他者の] 顔 [*visage*] [……] とは、私に抵抗することなく差し出されるこの面 [*face*] に対面した私が、「身を守ることなきこれらの眼の奥底から」、この弱さ、この無能力から、私の能力にことごとく手渡されると同時に、私のこのうえない能力を不可能性に逆転させながら私の能力を絶対的に退ける何かが立ち上るのを目にする時、私がこうむる経験なのである。顔の前では、私は何かをなすことがもはやできない [*je ne peux plus pouvoir*] とレヴィナスは強調する⁹⁾。

ここで不可能性の経験は、他者を前にして私がこうむる経験のうちに認められている。もし他者がもつぱら知の対象として私の前に差し出されるのならば、彼は「私の能力にことごとく手渡され」てしまうだろう。というのも、私は彼を名指し、名の同一性を起点としながら彼を知の対象として捉え、私のうちに取り込んでしまうことができるのだから。しかしながら、他者のこの弱さ、理解しようとする私の意志に対しては何もすることができないというこの無能力からは同時に、「私のこのうえない能力を不可能性に逆転させながら私の能力

9) «*Connaissance de l'inconnu*» in *L'Entretien infini*, p. 78.

を絶対的に退ける何かが」到来するのである。この何か——それがいかなるものかは措いておこう——にたいしては、私は能力の主体として、もはや何もなすことができない。言いかえるならば、私は他者に〈知ること〉によってはかかわることができない。このように、レヴィナスの思想に触発されたブランショは、これまで狭義の文学・芸術的経験において探求していた「不可能性」の次元を、一般的な人と人との関係、すなわち私と他者との関係のうちに探求するようになる。それとともに、「不可能なものに答える」という要請が、他者との関係のうちに現れる「不可能なもの」にいかに応えるか、あるいは、他者にいかに応えるかという問題につながられて論じられるようになる。このようにして、「不可能なものに私はいかに答えるか」という問題が、私と他者との関係において繰り広げられる「不可能性」の次元はいかなるものか、そして、「不可能な」関係にある私と他者、言いかえれば、能力の主体としての自我と、自我と同等の資格で存在すると見なされる他我との弁証法的な間主観性には還元することができない関係においては、いかなる言語活動が生じるのかという問題として捉え直される。

それでは不可能性の次元として私と他者との言語活動に認められる側面とはどのようなものか。ブランショはレヴィナスの思想を参照しながら、言語活動における「呼びかけ」に注目する。

私が他の人に話すとき、私は彼に訴えかける。話すこととは、何よりもまず、この呼びかけるといふこと、加護を求めるといふことである。そうした場合、加護を求められた者は手が届かないところにいるのであり、侮辱されても尊重され、黙るように命じられても言葉の現前へと呼び求められており、私が彼について語ることに、すなわち、話題や話柄に還元されることがなく、私を凌駕し私の上に張り出すことで、常に私の彼方に、私の埒外にいる者である。なぜなら、私は見知らぬ者たる彼に、私の方を向くことを祈り、異邦の者たる彼に私の言うことを聞いてもらうように祈っているのだから¹⁰⁾。

10) *Ibid.*, 79.

他の人を前にして、他の人について語るのではなく、他の人に「呼びかける」こと、そこにブランショは、言語活動の非弁証法的側面を見いだそうとする。少し説明しよう。私が誰かに呼びかける時、この呼びかけという言語活動は、呼びかけられた者を、「私が彼について語ること」、すなわち私が彼に付与する意味に還元することを目指しているのではない。もちろん誰かに呼びかけた後で、彼が誰かと知ろうと欲してその名を聞き、その名を基にして彼について知り、そうして獲得した知識にその誰かを還元してしまうこと——それをブランショは「可能なものを名付ける」弁証法的な言語活動と考えるわけだが——、そうした言語活動のほうが人と人の間では頻繁に起こる。レヴィナスとともにブランショが注目しているのは、そうした知ろうとする意図に先立つ言語活動、何かを知ろうとする目的のために用いられるのではない「呼びかけ」である。この呼びかけは別の箇所で、「他者を決して名付けることがなく、見知らぬ者たる彼が私のほうを向くように、彼に訴えかける発語¹¹⁾」と言われている。つまり、他者の存在を名付け、それについて語ることによって他者の他者性を私が了解できる意味に還元することなく語る言語活動、言いかえるなら、知の対象として何かを捉える「可能性」の埒外で——「不可能性」の次元で——他者を見知らぬ者として迎える言語活動が、「呼びかけ」のうちに模索されている。

ブランショはこうした「呼びかけ」という言語活動を、さらに、他者にたいする *responsabilité* に結びつけて考える。

——したがって、私の責務とは以下のようなものとなるだろう。私の理解を超えるあの言葉に応えること、それを真に理解したわけでもないのに応えること、それを繰り返しながら、それに語らせながら応えること。

——可能なものを名付けること、不可能なものに応えること。あらゆる言語活動における二つの重心を、私たちがこのように指し示していたのを私は思い出す¹²⁾。

11) «Tenir parole» in *L'Entretien infini*, p. 92.

12) これは、一九五九年に発表された論考「いかにして薄暗きものの覆いを取るか」

——こうした応答、応答することによって始まり、その始まりにおいて、〈見知らぬ者〉と〈異邦の者〉から到来する問いを繰り返すこうした発語、それこそが、あの応答の責任 [responsabilité] の原理としてあり、それは後に、話さなければならないという要請を有する厳格な言語活動において表現されるだろう¹³⁾。

まとめておこう。レヴィナスを参照するブランショは、私と他者との間に生じる「不可能」な関係を、呼びかけと応答の関係として考えようとしている。上の引用では、私は「私の理解を超えるあの言葉」、すなわち、他者から到来する言葉に、「それを真に理解したわけでもないのに」、「それを繰り返しながら」、「それに語らせながら」応えなければならないと言われている。なぜ他者の言葉は私の理解を超えるのか。それは、私が彼について知ることができる以上の知りうることを他者が常に隠しているからではなく、知に基づいた関係とは別のかたちでかかわるように他者が私に向けて話すから、すなわち理解可能性の埒外で応答するように呼びかけるからである。だからこそ、他者に応えるためには、他者について話すことなく、他者に向けて呼びかけ、他者を私の知のうちで同化することなく、異邦の者、見知らぬ者のまま迎えなければならない。他者が何を私に話そうとしたか、私は何を理解することができたか、私は何を答えることによって他者に応えることができるのかといったことを問題とする前に、何よりもまず応えなければならない。このような応答は、私が私の意志に従って私の能力によって実現できることではなく、それがうまく遂行さ

(«Comment découvrir l'obscur» in *L'Entretien infini*, p. 57-69) への言及である。この論考においては、詩が触れようとする「薄暗きもの」は、名指して捉えることができるものの領域(可能性の領域)に属するものではなく、「不可能性」の領域に属するものであることが説かれる。引用部分でこの論考に言及されていることの意味は大きい。というのも、この言及を通して、他者と私の言語活動で生じる不可能なことが、以前の探求、すなわち、文学作品を書くことによっていかにして不可能なこと——「薄暗きもの」——に応えるかという問いにはっきりと結びつけられているからだ。

13) «Tenir parole» in *L'Entretien infini*, p. 92-93.

れたかどうかを判断することもできない。あくまでもイニシアチヴは他者であり、私は唯私の能力を超えるもの（能力がかかわることができないもの）に限りなく応えねばならず、そのようにして私は、主体としての能力、可能性を根本的に問い直される「不可能性」の次元に導かれる。

Ⅲ 他者たちに代わって応えること

1. 収容者のうちに現れる他者——他なるものを迎える条件

それでは、この応答とは具体的にはどのようなものなのだろう。そして、応答の責任と弁証法的な要請とを両立させる必要性はいったいどのような状況で問題となるのだろうか。

この問題は、先に触れた『全体性と無限』を契機として書かれた第三の論考において考察されている。『終わりなき対話』で「破壊できないもの——2. 人類」と題されているロベール・アンテルム論は、もともとは「破壊できないもの」の題で NRF に発表された。NRF でのヴァージョンを見ると、このアンテルム論がレヴィナスによって提出された他者の問いを検討する探求のうちにはっきりと位置づけられていることがわかる¹⁴⁾。『終わりなき対話』の「人類」は、「『他者』とは誰かという問いが私たちの言語活動のなかに到来する度に、私はロベール・アンテルムの本のことを考える¹⁵⁾」と始まるが、この「他者とは誰か」とは、レヴィナスが思考するように導く他者とは誰かということであり、この問いをブランショは、アンテルムが証言する経験、主体としての能力をことごとく剥奪され、もはや「私」としては存在できなくなった経験を通して考察しようとする。ブランショはアンテルムがそうなることを収容所の中で強いられた実存様態、すなわちアンテルムという「私」のうちに、主体の

14) «L'indestructible» in *La Nouvelle Revue Française*, No. 112, p. 671-680, 1962, repris en forme modifiée dans *L'Entretien infini*, p. 99-100, p. 102-103 («Le rapport du troisième genre (homme sans horizon)»), p. 191-200 («L'indestructible. 2. L'espèce humaine.»).

15) *L'Entretien infini*, p. 191.

消失とともに現れた「他者」を、他者の問題として考察するというのだ。

ブランショはアンテルムの本を読むことで、「人間は破壊することができないものである、しかしながらそれは破壊されうるということを私たちは理解し始める」と言い、これを言い換えて「人間は破壊されうる破壊できないものである」と定式化する¹⁶⁾。ブランショはこの定式によって、アンテルムの特に次のような言葉を理解しようとしている。「しかし曖昧なところはない、私たちは人間に留まり、人間でしか終わらない。私たちが彼らと同じ人間であるからこそ、SS たちは私たちの前で結局無力なのだ。[……] 処刑者は人間を殺すことはできるが、人間を他のものに変えることはできない¹⁷⁾」。アンテルムがこの言葉によって訴えようとしているのは、人間は獣のように残飯を漁り、植物が腐るように収容所のベットのなかで衰弱し、「外の世界」で人間に認められている尊厳や能力を剥奪され主体として破壊されても、植物や動物といった他の類には変えることができないものとして、すなわち人類に属するものとして残り続けるということだ。処刑者は、この人類へ所属する者を殺すことはできても、その者が人類に所属しているということ、すなわち人間以外のなにものとしても死なないということは否定することができない。主体性が破壊されても破壊できないものとして残り続ける人類への所属関係、それをアンテルムは「人類に所属するという究極の感情」と呼び、「唯一にして最後の権利要求として表現」しようとするわけだが¹⁸⁾、そうした所属関係以外の全ての「人間性」を否定された人間、そのような人間をブランショは「他者」として考察しようとする。

注目に値するのは、そうした破壊できないものとなった私、すなわち主体としての私とは異なる「他者」になった私のうちに、ほかの他者たちを迎える運動が認められることだ。アンテルムの経験を、ブランショは次のように解釈する。

16) *Ibid.*, p. 192.

17) *Ibid.*, p. 192 に引用されているアンテルムの言葉。Cf, Robert Antelme, *L'Espèce humaine*, Gallimard, 1957, p. 229-230.

18) «Avant-propos» in *L'Espèce humaine*, p. 11.

しかし私たちが今、アンテルムの経験、[もはやそれ以上] 削ることのできないものにまで削られた人間の経験において出会うのは、根本的な欲求であり、それはもはや私自身には、私自身の満足にはかかわらず、欲求の水準での欠如として生きられる純粹で単純な人間の実存にかかわる。そしておそらくそれはなおも一種のエゴイズムであり、最もひどいエゴイズムですらあるのだが、しかしそれは、ある自我なきエゴイズムなのであり、その水準において人間は生き残ることに固執し、卑しいと言わねばならぬ仕方で生きること、ずっと生き続けることに執着するのだが、この執着を生への非人称的な執着として抱いており、この欲求をもはや自分自身のものではない欲求、虚ろでいくぶんか中性的な欲求として、そのようにして潜在的には万人の欲求として抱いている¹⁹⁾。

このようにブランショは、極限状況における生の欲求に「非人称的」や「中性的」という用語を当て、それまでの主題であった狭義の文学的経験、すなわち、書くことによって作家や詩人が「私」から「彼」になる経験に結びつけているわけだが、ここで何よりも注目には値するのは、非人称的、中性的欲求が、潜在的に「万人の欲求」となる可能性が思考されていることだ。私がもはや第一人称として語り理解する能力の主体として存在することができない実存様態、要するに、私が「他者」になる経験が、もはや私自身の経験ではなく、潜在的に万人が被る、非人称的で、中性的な経験になると解釈されている。さらには、そのような実存様態に「全ての人間関係の未来と意味」の担い手が認められる。

抑圧と不幸によって私の私自身への関係が失われ変質する際、私は無限の距離によって私が隔てられるあの見知らぬ者、異邦の者となり、私は無限の分離そのものになるのだが、欲求は満足も価値もない根本的な欲求となる。それは、剥き出しの実存への剥き出しの関係であるのだが、それはまた非人称的な要求にもなるのであり、その要求だけが、全ての価値の、よ

19) *L'Entretien infini*, p. 196.

り正しく言えば、全ての人間関係の未来と、そして意味とを担っている。
[……] それはあたかも、私を養いながらも、私が養っているのは私ではないかのようで、私自身をではなく、見知らぬ者、異邦の者をもてなす人として、私が〈他なるもの〉を迎えるかのようだ²⁰⁾。

このようにして、根本的な生の欲求を通じて、「剥き出しの実存への剥き出しの関係」があらわになるとされ、そのような関係において私は、あたかも私自身の内なる「見知らぬ者」、「異邦の者」をもてなす人として〈他なるもの〉を迎えるかのように、「全ての人間関係の未来」と「意味」とを担うとされている。つまり、私自身が私の内なる他者を迎えることが、〈他なるもの〉一般を迎える条件として、そして、あらゆる他の他者たちを迎える条件としてここで思考されている。

ただし、全ての人間関係の未来を担うこの可能性は、苦況に陥った人間同士は必ず助け合い、パンを分かち合うはずだという楽天的な見方から考察されているわけではなかろう。アンテルムが証言しているように、収容所で飢えに苦しむ人々はスープを取り合い、自分のためにパンを隠し、時には他人のパンを盗むのである。欲求により「他者」に変えられた者が、全ての人間関係の未来と、そして意味とを担っているのは、パンを常に他者たちと分かち合うからではない。そうではなくて、そのように欲求に釘付けにされた者たちの間でこそ、逆に人間関係の未来は危機に晒されるのだ。「他者」にならざるをえない状況では、「外の世界」で人間に認められている人間性、良心を持ち責任を果たさねばならないと見なされている「私」の主体性、「人間的な」と言われる一切の関係が根本から問い直され、人と人との間が剥き出しになって現れる。しかしながら、たとえ「人間的な」関係が断たれようとも、そのような剥き出しの関係はあいかわらず人と人との関係である。アンテルムの『人類』には、他人のパンを盗んで平気である者も記されている。彼らもまた人間以外の何ものでもない。SSたちとの間に一切の「人間的な」関係が存在しなくても、SSた

20) *Ibid.*.

ちとの関係はそれでも人と人の関係である。「SS たちもまた私たちと同じ人間でしかない²¹⁾」。人間として否定された者たちは、それでもなお自分たちが「人類に所属するという究極の感情」、その同じ感情でもって、自分たちを人間として否定した SS たちもまた人類に所属することを認めざるをえない。そうした事実を受け入れてこそ、「全ての人間関係の未来と意味を担う」とはいかなることかを考えることができよう。例えばアンテルムは、パンを盗んだことが友人たちに知れた後に急速に衰弱し、死んでしまった男のことを記している。この男が良心の呵責に責め苛まれて衰弱したかどうかは書かれていないが、アンテルム自身の次のような省察が見られる。

シモンがしでかしたことは私たちに震えさせていた。あたかも彼が自殺しようとしたか、気違いになったかのように。各人が絶えずその危険を冒していたたったひとつの行為のなかに、かくも取りかえしのつかぬかたちで表れることができた真実を、皆のために、自らのために——狂気や自殺にたいして恐れうるよりももっと——恐れていた²²⁾。(強調は引用者)

全ての者がパンを盗む可能性があること、友を裏切る可能性があること、他者たちを事実上迎えることができない可能性があること、それは真実なのだ。注目したいのは、この真実にたいする恐れである。まさに友を裏切る危険にたいする恐れにおいて、他者たちへの配慮が表れている。この配慮は、倫理を侵犯するおそれがある自分自身——すなわち私にとっての「他者」——や他の者たちにたいしての配慮であるとともに、パンを盗んだ当のシモンがこれから蒙ることになる不幸にたいする配慮でもある。このような、他者のために、他者に代わって不幸を意識することがなければ、「あらゆる関係が再び闇に沈み込む」

21) *L'Espèce humaine*, p. 229.

22) Robert Antelme, *Textes inédits sur L'espèce humaine, Essais et Témoignages*, Gallimard, 1996, p. 64. アンテルムはそれが誰か一般に知れることを配慮してガリマール版ではこの箇所を削除した。

(次の引用箇所を参照) ことになろう。主体から「身を落とした」人と人の間では、他者たちを迎える可能性そのものが試練に晒される。その試練のなかで、他者たちへの不幸の意識が目覚めるかどうか、人間関係の未来と意味はかかっている。

2. 他者を救うための主体の立て直し——共同体の必要性

ブランショは剥き出しの実存への剥き出しの関係に、人間関係の意味の担い手を認めるだけでは満足しない。さらに、主体の能力を剥奪された「他者」が救われるための議論が展開され、そこで、ある「主体」が立て直される必要性が説かれる。

——ただ、欲求によって既に全てが救われると思ってはならない。欲求によって全てが賭けられるのである。まず第一に、人間は欲求の下に身を落とすことがありえる。欲求を奪われ、剥奪状態を剥奪されうる²³⁾。しかしさらにこう言わねばならぬ。享受なき欲求が保たれる水準、その水準においては、私のなかに固有の意志よりもむしろ、ほとんど非人称的な肯定があつて、それだけが剥奪されているという事態をなおも支えており、従つて、私が私と結ぶ関係によって私は絶対的に〈他なるもの〉になり、その〔〈他なるもの〉〕の現前が〈権力者〉の能力を根本的に問い直す時である

23) ブランショはここで「地獄についての考察」(*L'Entretien infini*, p. 256-322)を参照するように促している。その論考においては、否とすることができる反抗的人間と、シーシュポスのように出口のない状況に囚われ、反抗することができず否とすることができない人間との隔たりが考察されている。この註から分かるように、ブランショは欲求によって剥き出しの実存に釘付けにされる者を人間の限界と考えているわけではない。絶滅収容所におけるユダヤ人は、生きる欲求を剥奪され、処刑者の思うがままに身を屈したユダヤ人たちを「回教徒」と呼び、生きる欲求を持つ自分らと区別しようとした。「回教徒」はまさに欲求の下に身を落とした人間である。ブランショの議論は、欲求に釘付けにされるまで破壊された者たちだけでなく、それよりももっと破壊された人間も射程に入れている。「人間は破壊できないものである」とは、「人間の破壊には限りがないという意味だ」と論考の最後では言われている (*L'Entretien infini*, p 200)。

のだが、そんな水準においてすら、この運動は能力の失墜だけしかいまだ意味せず、「私の」勝利、況や「私の」救済は意味しない。そうした運動が現実的に肯定され始めるには、私がそうあることをやめたあの私の外で、ひとつの〈私—主体〉の審級が無名の共同体において、もはや「他者」に対して聳える支配し迫害する権力としてではなく、見知らぬ者と異邦の者とを迎える、すなわち、真の言葉の正義において迎えることができるものとして立て直される必要がある。そしてさらにはもうひとつの可能性が、すなわち、不幸にたいするあの注意——そうした注意がなければあらゆる関係が闇のうちに再び沈み込んでしまう——を起点として、ひとつの〈私〉が、私の外で、あたかも私の代わりに不幸を意識するだけでなく、そこに全ての人々に対して犯された不正義を認め、その不幸を身に引き受け、そうすることで共同の権利要求の出発点を見いだす可能性が介入してくる必要がある。

——別の言葉で言えば、ひとつの外在的な〈主体〉を仲介にして、それがひとつの集団構造を代表するかのよう²⁴⁾に確立され（例えば「階級意識」）、剥奪された者が言葉の正義において「他者」として迎えられるだけでなく、弁証法的な闘争状況にふたたび置かれ、彼がまたひとつの権力として、欲求の人間が、そして終いには「プロレタリア」が握る権力として考慮されるようにならねばならない（註三）。従って私たちはふたたび二重の関係の要求に立ち戻ることになる²⁴⁾。[註三については後に戻る。]

このようにして、主体としての能力を剥奪された人間が、「ひとつの外在的な主体を仲介にして」救われる必要性が説かれ、そしてそこにおいて、弁証法的な要求に応じる必要性が説かれている。その論理をまず確認しておこう。

他者となった私は、無能力それ自体によって、能力、権力を根本的に問い直すことができる。また全ての人間関係の意味の担い手となる可能性が、私が私自身をではなく、〈他なるもの〉を迎えるような実存において開ける。しかし

24) *L'Entretien infini*, p. 196-198.

ながら、そのように私自身が主体とは他なる者になっただけでは、そのような他なる者は「救済される」わけではない。それが救済されるためには、ひとつの「私一主体の審級」が立て直されなければならない。しかし立て直されるべき「主体」は、『他者』に対して聳える支配し迫害する権力』であってはならない。この支配し、抑圧する権力とは、特定の支配者や支配者層や国家などの権力だけを指すのではなく、一人称として語るあらゆる私の能力に含まれる、語る対象を否定してその意味を我が物とする能力も指すことを思い出しておかねばならない。それでは立て直されるべき「主体」は、いかなるものであらねばならないのか。要点を確認しておこう。

一) 立て直されるべき「主体」は、まず第一に、主体性を破壊された他者の不幸に注意し、主体として語るができない他者を「真の言葉の正義において迎えること」ができなければならない。「真の言葉の正義において迎えること」とはいかなることかは具体的に述べられていないが、少なくともそれが、〈知ること〉によって他者を理解するのではなく、他者を「見知らぬ者」のまま、〈他なるもの〉のまま迎えることであるのはたしかである。それでは、他者を〈他なるもの〉のまま迎えるとはいかなることなのだろう。「そうした注意がなければあらゆる関係が闇のうちに再び沈み込んでしまう」と言われていることに今一度注目しておこう。他者を迎える条件は、何よりもまず他者への「注意」である。

二) 立て直されるべき「主体」は、各人のうちにいる他者の不幸に注意するだけでなく、そこに「万人に対して犯された不正を認めて」、「共同の権利要求の出発点」を見いだす必要がある。つまり、立て直されるべき「主体」は、実際にその人たちにたいして注意することのできる個々の他者たちだけでなく、出会ったこともないあらゆる他者たちも迎える必要があるということだ。

三) そしてさらに、剥奪された者がひとつの「権力」として考慮されるように、ある集団構造を代表する「主体」、すなわち、主体として存在することができない者たちを代表する「主体」が確立される必要があるとされている。つまり、ここでブランショは、主体として語るができないあらゆる者たちに

代わって共同の権利要求をすることができる「主体」として、共同体が生みだされる必要性を説いている。

このようにして、他者に応える要請（私の内なる他者、そしてそれを通じてあらゆる他者たちに応える要請）に、弁証法的な要請が結びつけられ、他者たちを迎える共同体が（それに「無名の」という形容詞がついていることについては後に戻る）、「両立させることができないものを統一する必要性」のもとに素描されている²⁵⁾。

3. 無名の共同体——両立させることができない二つの要請をいかに統一するか

アンテルム論は来るべき共同体への展望を示しただけでは終わっていない。注目すべきは、他者たちを迎える共同体にブランショが留保をつけており、その留保によって、そうした共同体の可能性そのものが問い直されていることだ。

ブランショの留保は註三に表れている。そこでブランショは、他者たちが権力として承認される過程に、最大の困難を認めている。

註三：しかし——はっきりとさせておく必要がある——、それがもっとも難しい。まず第一に、〈他なる〉人間、絶対的に奪われた者と、およそどんなものであれ権力の形態の間には、たとえそれが保護的なものであっても、乗り越えられない対立のようなものがあるからだ。そのことをロベール・アンテルムは無を言わせぬ簡素なかたちで述べている。「ここでは常に、いまだに強い人間にたいして疑いがかけられる。そうした人間は私たちが手にしている手段によって私たちを守るのではなく、ここの誰も手にしていない筋肉の力で私たちを守るのだ。おそらく役には立ち、力を発

25) NRF のヴァージョンでは、先に引用した箇所は次のように締めくくられている。「従って私たちはふたたび二重の関係の要求に、その両立不可能な必要性のもとに立ち戻ることになる。」（強調は引用者による。） Cf, «L'indestructible» in *La Nouvelle Revue Française*, No. 112, p. 678.

揮できるこの男は私たちの一員としては私たちには現れない」²⁶⁾。

このように、「他なる人間」、「絶対的に奪われた者」が弁証法的な闘争においてひとつの権力として認められるための外在的な「主体」の必要性が語られるとともに、その難しさが強調されている。それが難しいと言われるのは、他なる人間とあらゆる権力の間には「乗り越えられない対立のようなものがある」と考えられているからだ。ブランショがもっとも重大な対立として考察を促そうとするのは、語ることができる者と語ることができない者との対立である。収容所においては、主体としての能力を奪われた者たちと絶対的な権力を握るSSの間で「いかなる言語活動も可能ではない」だけでなく、収容者たちの間でも「一切の表現の可能性がない」。全ての人間関係の未来を担うはずだと言われた、剥き出しの実存に釘付けにされた者たちは、「〈他なる人間たち〉が絆を欠いて縋れあっている状態、他者のマグマ」でしかなく、相手の言葉を迎えることができる「私」は、「瞬時のやりとり」以外現れない²⁷⁾。

いったい誰が「他なる人間たち」を「真の言葉の正義において迎え」、彼らの代わりに共同の権利要求をすることができるのだろうか。というのも、そもそも生還した者、「他者」になるという経験を自ら蒙った者は、体験を語りたい、聞いてもらいたいという熱狂に駆られながらも、自分自身が「他者」になった経験を語ることができないのである。アンテルムは『人類』の「緒言」で次のように述べている。

二年前、私たちが生還した直後の日々の間、私たちは全て——と、私は思うが——まさしく熱狂の虜になっていた。私たちは話したかったし、最後には理解してもらいたかった。私たちの身体的な外見だけで充分雄弁であったと私たちは言われる。しかし、私たちは戻って来たばかりで、私た

26) *L'Entretien infini*, p. 197 en note. この男は収容者の一人である。Cf, *L'Espèce humaine*, p. 294.

27) *L'Entretien infini*, p. 198-199.

ちの記憶、私たちの生き生きとした体験を私たちとともに連れ帰っていたのであり、その体験をあるがままに語りたという熱に浮かされた欲望を感じていた。しかしながら、最初の日々から既に、私たちが手にしていた言語と、私たちのたいていがおも私たちの体のなかで続けているあの体験の間に私たちが発見していた隔たりを埋めることは、私たちには不可能に思われた。私たちがどのようにしてそんな状態に至ったのかを説明しないように諦めることがどうしてできようか。私たちはなおもその状態にいたのだ。しかしながら、それは不可能だった。語り始めるとすぐに、息が詰まってしまうのだった。私たち自身にとってすら、私たちが言わねばならなかったことが、その時想像できないものとして現れ始めたのだ²⁸⁾。

語ることができる主体に一旦立ち戻りそれを語ろうとするやいなや「息が詰まり」、それを体験した者にすら「想像できないもの」として立ち現れる体験。そうした体験と言語活動の間には、埋めることができない隔たりがあるのだ。このアンテルムの証言をうけてブランショは、「絶対に奪われた者」たる他者と、私として話す能力を持つ主体の間には、この私がまさに自ら他者になった体験をしていようとも、両立することができない対立があると考えているのだ。それでは、主体の能力を剥奪された者を「真の言葉の正義において迎える」可能性はないと結論せねばならないのだろうか。

この「可能性」を弁証法的な意味で理解するならば、そのような「可能性」はないと言わねばならないだろう。たしかにアンテルムは他者になった経験を伝えることができない。それをそれでも語ろうとしたアンテルムの言葉をどのように理解しようとしても、アンテルムの経験は、理解されざるものに留まったはずだ。しかしながらブランショが私たちに考えるように促すのは、まさしく、広い意味での言語活動は弁証法的な可能性だけでは汲み尽くされないということだ。名付けることによって捉え、そして理解できるように伝達するのと

28) «Avant-propos» in *L'Espèce humaine*, p. 9.

は別の言語活動こそが、「不可能なものに答えること」として模索されているのである。「私の理解を超えるあの言葉に答えること、それを真に理解したわけでもないのに答えること、それを繰り返しながら、それに語らせながら答えること」、それが「応答の責任」とされていた。ブランショは、この応答の責任を引き受けた言語活動に、「私たちの究極の次元」としての「コミュニケーション」を見いだそうとしていた。

もしも不躰にコミュニケーションは不可能であると宣言することが私たちにあるものなら、あきらかにだしぬけなそのような一文は、コミュニケーションの可能性を破廉恥にも否定するように定められているのではなく、唯単に話すあのもうひとつの言葉が、可能性の時間に支配されないもうひとつの領域に答え始めるとき、その言葉にたいする注意を目覚めさせるように定められているのだと理解する必要があるだろう。この意味において、そうなのだ、私たちはそれをすぐに忘れる覚悟で次のように言わねばならない。「コミュニケーション」——共通の尺度がもはやない以上ここでは不適切である用語を捉え直して言うなら——、コミュニケーションは、それが能力の手から逃れ、そこで不可能性が告知されるときに初めて、私たちの究極の次元となる²⁹⁾。

それでは、「私たちの究極の次元」としての「コミュニケーション」とは、具体的にはどのようなものなのだろうか。

「破壊できないもの」においては、強制収容所における非人称的な実存を出発点として他者たちを迎える条件が考察され、そしてそこから、他者たちの代わりに共同の権利要求をなす共同体の問題まで立てられていた。たしかにブランショは、それ以前の探求においても、主体の解体と非人称的な実存への接近を、文学、芸術の問題として考察していた。しかしながらそこでは、他者の言葉に答えるための共同体をいかにして確立するかが具体的に模索されていたわ

29) «Comment découvrir l'obscur» in *L'Entretien infini*, p. 68.

けではない。そうした共同体が模索されるのは、五八年から六八年までの活動においてである。

例えばド・ゴールの政権奪取に抗議する『七月十四日』誌に発表された「拒否」では既に、「破壊できないもの」で素描された共同体の原則に則って、政治的な発言が行われていた。

私たちが拒否する時、軽蔑も興奮もない能う限り無名の運動によって拒否する。なぜなら、拒否する力は私たち自身によっても、私たちの名だけにおいても遂げられるわけではなく、話すことができない者たちにまず第一に帰せられる非常に貧困な始まりを出発点として遂げられるからだ³⁰⁾。
(強調は引用者による)

この「拒否」はブランショの署名が入れているが、『七月十四日』誌に続く「アルジェリア戦争における不服従の権利宣言」は署名者を募った宣言であり、ブランショはそこにはっきりと「無名の共同体」を認めている。宣言での試みを続行させる意図の下に計画された国際的な雑誌を立ち上げる際に、ブランショがサルトルに参加を求めた書簡では、宣言について次のように言われている。

彼ら [知識人たち] はまた [……]、一緒に存在するひとつのやり方を経験しました。私は「宣言」の集団的な性格だけでなく、その非人称的な力、署名した全員が自分たちの名前を出してそれに寄与したにせよ、自分たちの個別の真理も名前による名声にも依拠することなくそうしたあの事実のことも考えているのです。「宣言」は彼らにとって、諸々の名前からなるある種の無名の共同体 [une certaine communauté anonyme de noms] を象ったのでした。それはまさしく司法当局が本能的に断とう努力する注目すべきひとつの関係によってだったのです。

30) «Le Refus» in *Ecrits politiques, op. cit.*, p. 12.

知識人たちはこのようにして自分たちが代表するあらたな権力を意識し、そして漠然とでにせよ、この権力（権力なき権力）を意識したのです。
[……]³¹⁾

ブランショは国際的な雑誌に集団的性格を持たせようとし、「あらゆる人々に共通の思考を求めるのではなく、私たちの努力と疑問と潜在的な可能性とを共有することによって、とりわけ、私たち自身の思考を内側から凌駕することによって、あらたな可能性を解き放つ³²⁾」ことを目指す。六八年五月の「学生—作家行動委員会」会報でも、「集団的あるいは複数的な言葉、すなわちエクリチュールのコミュニズムを構成するように定められた³³⁾」無名性が求められる。明らかに五八年から六八年にかけてのブランショは、無名の集団によって実現されるであろう、あらたな「権力」、「権力なき権力」を模索している。ブランショが、このような「無名の共同体」によって現出する「権力なき権力」に、語るができない者たちとの間にある埋めることのできない隔たりを越えて——隔たりを隔たりとして残したまま——彼らに答えようとする言葉の力を見いだそうとしていたことは想像に難くない。

『国際評論』誌の計画は結局頓挫する。「学生—作家行動委員会」会報も第一号しか日の目を見ない。しかしながら、話すことができない他者たちを迎え、彼らの代わりに発言することができる共同体の必要性、可能なものを名付け、不可能なものに答えるという両立しえない二つの要請を統一する必要性は残る。その後ブランショはアウシュヴィッツについて次のような言い方をすることで、二つの要請の両立不可能性とそれらの統一の必要性とを同時に厳密に繰り返し続けるだろう。

31) Lettre de Maurice Blanchot à Jean-Paul Sartre, 2 décembre 1960, in *Ecrits politiques*, p. 46.

32) *Ecrits politiques*, p. 51.

33) *Ibid.*, p. 97.

再び言わねばならないでしょうか（そうです、そうしなければなりません）。私たちに終わることなく問いかける出来事、アウシュヴィッツは、諸々の証言を通して、忘れるなという取り消しえない義務を要求するので。思い出しなさい、忘れないでいるように警戒しなさい、しかしながら、そうした忠実な〈記憶〉のなかで、決してあなたは知ることにはならないでしょう。[強調はブランショによる。]³⁴⁾

決して知ることができないことを忘れないように警戒するこの呼びかけ。この呼びかけに今度は私たちが応答するかどうか、他者たちに代わって発言する共同体の実現はかかっている。

34) «N'oubliez pas» in *Ecrits politiques*, p. 172. 「起こったことを知りなさい、忘れないようにしなさい、しかし同時に、決してあなたは知ることにはならないでしょう」という同じような言い方が既に以下のテキストで繰り返されている。*L'Écriture du désastre*, Gallimard, 1980, p. 131; «Notre compagne clandestine» in *Textes pour Emmanuel Levinas*, Jean-Michel Place, 1980, p. 87; «N'oubliez pas!» in *La Quinzaine littéraire*, no. 459, 16-31 mars 1986, p. 12.